露地（ろじ）

茶室の庭を露地と呼びます。広義には、屋根などの覆いのない地面を言い、家と家の間の狭い道や屋敷地内の狭い通路のことです。当初の露地は、茶室へ行く通路であったことから、そう呼ばれるようになったと思われます。千利休は露地を「浮世ノ外ノ道」と表し、茶の湯の世界と日常世俗を分けました。日本旅館には茶室を設えているところもあり、侘び寂びの世界がにじみ出た露地の構成美を嗜むことができます。

蹲（つくばい）

茶庭などに低い位置に設えられた石の手洗鉢、手水鉢を言います。茶道の習わしとして、手を洗い、口を清めるために、這いつくばるように身を低くして用いたことからそう呼ばれました。溜まった水をすくう柄杓が置かれていますが、直接、口はつけません。日本旅館の茶室そばや庭園などにもよく置かれています。

下駄（げた）

木製の台に2枚の木の歯を組み付けた外履きです。台木には3つの穴に鼻緒という足掛けが通されていて、素足または足袋を着用して足の親指と人差し指で固定して履きます。同じような構造の履物に、草履や雪駄があります。草履は、藁や井草、竹皮などの植物を編んで作られたもの。雪駄は千利休が考案したと言われ、本来は畳表の草履の裏に獣の皮を貼り、鉄の鋲を打った履物です。草履、雪駄ともに、現在ではさまざまな素材が用いられています。旅館には、浴衣でちょっと外出したり、庭を歩いたりする時のために、これらの履物が用意されています。

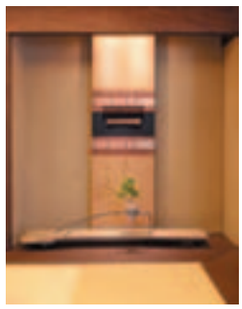
足袋（たび）

和装の時の足型になった袋状の履物です。親指と他の指が分かれる形になっていて、下駄や草履、雪駄が履けるようになっています。踵の上部に合わせ目があり、複数の爪型の金具で留めます。

和傘（わがさ）

和装の時に差す、竹製の骨に油和紙が張られた日本の雨傘です。番傘、蛇の目傘などの種類があります。番傘は、大衆向けで大きめです。蛇の目傘は、開いた時に丸く見える輪が大蛇の目を思わせることから付いた名称で、番傘より細く上品です。旅館には、雨の日の外出用に常備しているところがあります。

床の間（とこのま）



座敷部屋の壁面に、床を一段高くして、壁に奥行きを付けた日本建築の伝統様式です。正面の壁に書画（掛け軸）を掛けたり、床に置物や花瓶などを飾ったりします。幅1間（約1.8m）、奥行き半間が現在の標準ですが、かつては幅が広く、奥行きは浅かったようです。旅館の和室座敷にもほぼ設えられていて、季節に応じた掛け軸や花が、ひとつのインテリアになっています。

掛け軸（かけじく）

壁に掛けられるように表装した書画です。そもそもは書画の保存が目的で掛け軸に仕立てられました。四季や伝統行事に合わせて掛け替え、保管時には軸に巻いて収納します。